

学 位 論 文 題 名

ロゴスと真理－ハイデガーのロゴス論－

学位論文内容の要旨

本論文は、M.ハイデガー(1889-1976)の主著『存在と時間』(1927)の思想を、「ロゴス」という観点から捉えなおしたものであり、全 6 章から構成されている。全体を貫く多田氏の主要な関心は『存在と時間』の核心となるべき、しかし書かれることのなかった第一部第三篇において論じられるはずであった「あらゆる存在理解の可能的地平としての時間」(SZ.1)即ちテンポラリテートがいかに現象学的構成にもたらされるかを 1944 年のヘラクレスのロゴス論にいたるまで追跡することにある。この根本的関心のもとで全 6 章を貫く主題は、『存在と時間』の体系構想を、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』第 6 巻における「魂のロゴスを持つ五つの部分」(テクネー、知識、ヌース(直観知)、プロネーシス(実践知、良心)そしてソピア(知恵))の解釈として読むことにある。この問題意識から『存在と時間』を解釈した先行研究としては、ヴォルピやキシールなど複数が挙げられる。それらと多田氏の本論文の立場を分かちポイントは以下のものである。まず、『存在と時間』という書物の主導的目的を明らかにすること、第二には、その目的に鑑みて、1944 年夏学期講義における「ロゴス論」までを、その目的を完遂するために『存在と時間』の立場を維持しようとしたものとして再検討することにある。その主導的目的とは氏によれば哲学的根本諸概念としての「ウーシア」の根底に「恒常的現前性」という時間様態を見出すこと、さらに、それを非本来的時熟に基づくものとして「解体」し、それを統べる本来的時間の動性を語ることにある。この視点から『存在と時間』の構想を捉えなおすことにより、氏はアリストテレスにおけるプロネーシスに対するソピアの優位をハイデガーが逆転させたという従来解釈に対して、ハイデガーはアリストテレスと同様にソピアの優位を主張し、ソピアをそれに相応しい仕方でも語り返していると論じる。

第 1 章「『存在と時間』第 7 節におけるロゴスの定義をめぐって」では、『存在と時間』の「方法論」を提示している。ことに、「方法節」とも呼ばれる序論第 7 節を検討する。ここでは、「現象学」という概念が、「現象」と「学(ロゴス)」とに分けられ、その方法的役割から個別に定義される。「現象」とはその動詞形中動相の意味が「己を示すこと」「明るみへ置く」であることから、「自己示現するもの、顕なもの」である。そこから本論文の主題を提示する。「現・存在という名称を担うこの存在者は、「明け開かれて」存在する。…この明け開かれてあることの明るみを我々が理解するのは、ただ、我々が何か或る植えつけられた事物的な力というようなものを求めず、現存在の全存在体制に、つまり関心に、その関心を可能にしている実存論的可能性の統一根拠を、問いかける場合のみである。脱自的時間性が現を根源的に明け開いている」(SZ350)。この現象の「ロゴス」が探求される。ハ

ハイデガーは、言表の「真」とそれに先行するアイステーシス・ノエーシスの「真」について語る。そしてその両者を現象学の「予備概念」にそえ、その「真」と区別された現象学の「理念」を示唆している。第1章は、これらの事象連関を解きほぐすことに向けられ第2章以下のアリストテレス解釈の導入部の位置づけを持つ。

第2章『形而上学』第9巻第10章における「非複合的なもの」の位相をめぐってでは、アリストテレス『形而上学』当該箇所における「非複合的なもの」の解釈を検討している。「非複合的なもの」のうちから現存在の現在化する動性の先行性が汲みだされる。ヌースがその非複合的な対象に接触していることが真理の第一次的所在を言表や命題に求めるまえに、「出会いとしての真理」つまり非隠蔽性としての真理理解の基礎を提供している。彼は感覚やヌースの接触に、いかなる偽の可能性もない「ロゴスの契機」を析出している。ハイデガーは「非複合的なもの」のエネルゲイアにおいてのみ存在するという性格に基づき、さらなる展開を見せ、これを「直前性」と結びつけ、その根底に「現前性」という「時間的契機」を見出している。「恒常的現前性」はハイデガーがその初期から晩年に至るまで解体の対象として格闘を続けたものである。ハイデガーは「アリストテレスが単純なものとの関連で捉えている存在者の純粋な被発見性は現前的なものの塞がれざる塞がれえない純粋な現在に他ならない。・・・存在を現前性として現在から理解するとは、存在を時間から理解することである。ギリシャ人はこのような深遠な問題をなんら予感すらしなかった。(GA21,193)とし、現前性を軸に生成変化を逃れた恒常的な実体概念を解体する。

第3章「哲学的根本諸概念の由来としての「制作」と「環境世界」」ではテクネーが主題となる。この章における氏の解釈によれば、テクネーに導かれた「制作」という態度は哲学的根本諸概念が獲得された経験である。その制作が時間意味から見るなら「予期しつつ・保有する現在化」という非本来的な時熟に位置づけられている。ハイデガーは、ギリシャ的存在は「日常的使用と日常的視の圏域における特定の事象の現前性」として理解されているとし、「ウーシアとはこの使用にとって意のままになること」の意である。存在は「被制作的存在」(GA19,270)として意のままになることであり、この存在理解が解体される。

第4章「卓越した語り」としての良心では、プロネーシスの実存論的な解釈として「良心」を検討し、本来的時間に到達する。第5章「デュナミスとエネルゲイアー「制作」(Herstellen)」から「産出(Hervorbringen)」へ」では、ハイデガーは「良心」をプロネーシスであると理解し、その検討を介してはじめて視界へ入る、テクネーの本来の様態として、デュナミスとエネルゲイアを検討している。そして、第6章「ヘラクレイトスの断片50と45」では、結論としてヘラクレイトス解釈の俎上においてソピアを規定している。

前述の先行諸解釈においては、ハイデガーが1924年の講演「時間の概念」以来、永遠を等質的時間の投影として否定していることを論拠に、ハイデガーはソピアに対してプロネーシスを優先させたと解釈した。しかし、ソピアそのものを詳述した1944年夏学期講義『ヘラクレイトス』までを、「魂のロゴスを持つ五つの部分」の解釈として一貫した視座におい

て読み直すなら、以下のように結論できる。すなわち、ハイデガーは、客体的な時間規定における永遠を超克することで、本来的時間、すなわち「全体としての存在者」の脱去する動性のうちに永遠を見出し、それによってソピアをそれに相応しい仕方語りなおすことを試みたということである。これが本論文の最も重要な結論である。

また、その含意として今後の現象学研究に寄与しうるものを挙げることもできる。このようにロゴスという観点において『存在と時間』の思想を読み直すなら、ル・トールゼミナールにおける「意味・真理・場所」という時期区分にも、ロゴス論に固有な視点を提供することができる。「意味」と「真理」とが『存在と時間』の体系構想において一つであること、また、「真理」と「場所」を区別する新たな指標の提示、この2点が示される。

学位論文審査の要旨

主査	教授	千葉	恵
副査	教授	山田	友幸
副査	准教授	田口	茂

学位論文題名

ロゴスと真理－ハイデガーのロゴス論－

多田氏は『存在と時間』(1927)を中心に23年の『ナトルプ報告』から44年夏学期講義『論理学—ロゴスについてのヘラクレイトスの教説』に至るまで、クロスターマン版全集で34の著作を縦横に往来しつつ、ハイデガーが一つの問いをめぐって思索を展開していることを明らかにしている。その問いは年代に応じて表現は変遷を見るが、『存在と時間』の主題である「現存在の存在」の解明である。全体を貫く多田氏の主要な関心は『存在と時間』の核心となるべき、しかし書かれることのなかった第一部第三篇において論じられるはずであった「あらゆる存在理解の可能的地平としての時間」(SZ.1)即ちテンポラリテートがいかに現象学的構成にもたらされるかを明らかにすることである。

氏の独創性はテキスト解説の方法論としてハイデガーによるアリストテレス哲学の解釈を軸にハイデガーの思索を一貫したものとして摘出したことにある。それにより真理化するところの魂の五つの認知的態勢であるテクネー、知識、ヌース(直観知)、プロネーシス(実践知、良心)そしてソピア(知恵)がそれぞれ現存在の現の開示を通じて出会われる存在といかに連関するかを体系的に追及し位置づけたことは特筆に値する。その遂行はロゴスの二義(eg.ヘラクレイトスの大文字のロゴスとそれに同意する言表)と真理の二義(非隠蔽性として言表以前に出会われているものと言表の対応論的真理)を「全体としての存在者」の時間性の本来の時熟において開示されるものと関連づけることに他ならない。本論文はハイデガー哲学の統一的な読解を可能にするものである。

上述のように多田氏の申請論文は最初から最後まで一貫した論旨のもとに展開されており、整合的でありかつ説得的である。もし難を挙げるとすれば、「現」存在の存在の解釈学的展開に即した叙述であるが故に、アリストテレス自身が遂行した存在一般の「いかに語られるべきか」というロギコス(形式言論構築術的)な視点から「いかにあるか」の把握にいたる範疇論や様相論という一般的な存在分析に対する適切な考察を欠いている。そのかわりに実存範疇と全体存在者としてのピュシスに基づく存在解釈が遂行されるが、それは倫理学的存在論とでも言うべき展開となっており、存在理解が一面的となっている。第5、6章においては、ハイデガー自身の言葉をそのまま用いての議論の展開が多くなっており、4章までの一般的な観点から捉えなおす姿勢が後退した叙述となっている。しかし、

これはハイデガー自身の特徴を反映したものであり、解釈的な研究に留めたということであろう。全体としてハイデガーに即して一貫した筋道を提示した点はこれらの疑問点にもかかわらず大きく評価できる。なお、議論の展開として非本来の時熟から本来の時熟に至る道筋が躍動的に描かれ、書かれることのなかった第一部第三篇における主題テンポラリテートが説得力をもって析出されている。その結果ハイデガーの探求の道筋を一本のまっすぐな道として描くことに成功している。